

味の素食の文化センター活動のご紹介

津布久 孝子*

1. 食文化事業への道のり

1979年味の素株式会社は創業70周年記念事業の一環として、食文化事業をスタートした。その10年後、食文化事業を継承しつつ、さらに公益的次元に発展させるため、1989年同社の創業80周年の節目に当財団を設立し現在に至っている。まだ食文化という言葉が世の中に認知されていなかった1979年に味の素(株)は、食文化事業を何故スタートさせたのか？そこには、味の素(株)が辛い時期を乗り越えたからこそ食文化研究の大切さを強く感じ、事業としてスタートした経緯がある。食文化活動開始から遡ること10年前の1969年に、オルニー博士がグルタミン酸ナトリウム(MSG)の疑義に関わる論文をアメリカで発表した。これは、日本の新聞でも報道され、消費者に大きな衝撃と不安を与えた。この情報は、日本だけでなく他の国々へも波及した。当時、日本では公害問題もあって、企業批判の風潮が強まっていた。また食品関連の安全性問題が連続していたのも重なり、見当違いではあっても、科学者による安全性への疑義は、MSGへの信頼を傷つける形となった。一方、味の素(株)はこれを企業存亡に関わる問題として深刻に受け止め、同業他社と共にMSGの安全性の研究を権威ある外部機関に依頼。更なる安全性の科学的立証に向けて徹底的に実験を重ねた。安全性実験に必要なノウハウを蓄積しつつ研究を進めた結果、食品に添加して使用する場合、MSGは安全であることを科学的に証明した。最終結論が得られるまでの間に多大な時間と労力と経費を投入したが、これが、味の素(株)における技術体制を一層強化する役割を果たしたと同時に、人間が生きていく上でなくてはならない「食」に対して真摯に向き合うことを学び、人間が工夫を重ねて形成した食に関する生活様式全体である食文化研究に目を向けさせたきっかけとなった。

その食文化活動は1980～82年の3回にわたって開催された「食の文化シンポジウム」で具体化された。石毛直道先生をリーダーに、食文化の視点から、人類の食生活を見直し、東アジアの食事文化の特色をさぐり、世界の食の未来を考えようとするこの試みは大きな社会的反響を呼び、「食文化」という言葉が認知されるきっかけになったといわれている。シンポジウムの最終回で石毛先生は「食の情報センター」と「食文化の研究討論会」を設置し、継続的に食の文化活動を実施することを提言された。これを受けて「食の文化ライブラリー」と「食の文化フォーラム」をスタートさせたことが、その後の財団設立につながったのである。

* 執筆者：津布久孝子

所属/職位：財団法人味の素食の文化センター／専務理事

2. 財団の概要

当財団は食文化研究活動の支援を行う研究協力事業と食文化の発展のための普及事業を活動の二本柱としており、「食」を学問・文化として考察し、その成果を広く社会に発信している。食文化を学際的に考える会員制の研究討論会「食の文化フォーラム」、その成果を中心に最新の研究成果を一般の方々に広く知っていただく「公開シンポジウム」、「食文化誌『VESTA』の発行」、そして食の文化に関する専門図書館「食の文化ライブラリー」が主な活動となる。当財団のホームページ（<http://www.syokubunka.or.jp/>）に詳細に記載されているので参考にしていきたい。

3. 事業内容詳細

1 食の文化ライブラリー

港区高輪3丁目に食の専門図書館として一般公開している。高輪で所有している食の書籍4万冊。そのほか貴重本、江戸時代の食に関する錦絵200点等を保有。食に関心のある方が気軽に立ち寄って頂いたり、研究材料として興味がある方のお問い合わせも受け付けている。（この他、関西地区には味の素㈱大阪支社内に食のライブラリーがあり1万冊を保有している。）

2 「食の文化フォーラム」

食文化を学術的に考える研究討論会で様々な分野からのエキスパート約40名で構成されている。年に3回開催後その研究成果を本にまとめてドメス出版より刊行している。これまでに32冊を出版している。

3 「食の文化シンポジウム」

フォーラムで論議された内容を食に興味のある一般の方にお伝えするために年1回開催している。2014年度は「食と信仰のかかわり」をテーマに三重県との共同開催を行った。

4 「食文化展示室」

博物館ではないが、財団が所蔵する錦絵や貴重書に基づく情報を常設展示として一般に公開している。またその時々話題のテーマ（例えば「石毛直道食文化を探求する」、「相撲と食」、「3雑誌に見る昭和食モダン展」）をとりあげた企画展示も実施している。

5 「VESTA」

食文化の専門雑誌で年に4回発行。

「VESTA」は毎号、食文化に関わるひとつのテーマを掘り下げる特集と多彩な連載記事から構成。1989年に第1号が出版され2015年1月の97号「やわらかい食」が最新号となる。

4. 今後の展開

前記したように1979年事業スタートから35年が経過し、国内外の食文化研究は更に広がりが増している。当財団の活動も、単独での活動に留まらず、今回の立命館大学と国立民族学博物館の食に関する学术交流のように、国内外の食文化研究者、団体等と連携を強めることにより、国際社会にも情報交換や貢献できるものとする。これまでの活動に満足することなく、微力ながら食文化研究の隆盛のため更なる活動を深めていきたい。

